

宗教・・・キリスト教

1. キリスト教とは

キリスト教とは、ユダヤ人のイエス（前4頃~28年頃）が生地ガリラヤ地方の抑圧された社会の底辺層の精神の解放・救済を目的として、アラム語で実践・宣教された教えを、同じユダヤ人だがギリシャ語を第一言語とする国際人パウロによって都市型に改革されて、多くのヘレニズム都市に宣教され、その普遍性から多くの苦難を経てローマ帝国の国教となり、次いで西欧社会に、そして全世界に広く受け入れられた宗教です。世界の宗教の中では最大の信者数 21 億人を擁します。キリストとは「油を注がれし者(神に選ばれし者)」を意味するギリシャ語です。

2. ユダヤ教から生まれたキリスト教

ユダヤ教は 4,000 年前頃、シュメルの都市ウルを出身地とする放浪の族長アブラハムによって創始された宗教です。前 2004 年のアラム人の侵入によりウル第三王朝が終焉を迎えた時期と重なります。ユダヤ教は幾多の変遷を経て、「沙漠の宗教」から「神殿宗教」へと進化して行きますが、その過程で最初は 10 しかなかった戒律(モーゼの十戒)が時と共に進化して「神によって義とされる」(受け入れられる)ためにはトーラ(律法)が定める 500 数十の戒律を守ることが求められるようになり、イエスが生きたローマ帝国時代には、貧しく無学な人々にとっては、とても守りきれない窮屈で煩雑な宗教になっていました。また、病気や障害は犯した罪への神罰と考えられていた時代です。「弟子たちがイエスに尋ねた。『ラビ。この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。』」(ヨハネ 9:2)

イエスの活動の場であったガリラヤ地方は、歴史上の種々の強大な諸外国によって蹂躪され、支配され、苦しめられ、「ガーリール・ハ・ゴーイム」(異邦人の地域:ギリシャ語でガリラヤ)と呼ばれて中央からも常に阻害され、差別されてきた地域で、「地の民」と呼ばれて人間扱いされないような極めて貧しい民衆が多数惨めな生活をする社会でした。イエスの時代のユダヤ社会は、心身共に健常で、戒律を遵守していると自認する人たちが、病人、障害者、貧乏人、遊女、取税人を律法を遵守し得ない「罪人」として排除する紛れもない差別社会でありました。その差別化がユダヤ教の宗教的イデオロギーで正当化されている恐ろしい社会です。

イエスはこれらの差別された民衆に、差別社会を根源から改革して彼等を救う「神の国」が近づきつつあると述べ、人々に「悔い改めよ」、即ち、「神の国」を希求するなかで新しい人生を生きよと教えます。彼は差別された人々を精神的に解放し、悲惨な生活の中でも生きる上での希望や指針を持たせようとしたユダヤ教の改革者なのです。イエスの教えには一貫して貧者への深い共感と強い励ましが表示されています。



(新共同訳聖書 1987 年版)

イエスは一貫して民族を超えた「父なる神の愛」を説いていますが、その弟子や帰依者たちは嘗ての「統一イスラエル王国」を再建してくれると予言されている聖なる王として期待していました。

イエスの教えは多数の民衆の支持を受け、広がって行きますが、イエスが首都エルサレムに上った時、イエスを危険勢力と見なすファリサイ派から告発を受けて連行され、ローマ総督ピラトにより十字架刑に処せられます。ここに「イエスは復活して弟子たちの前に顕れ、40 日ののち昇天し、世界の終末の日に再び地上に臨んで最後の審判を執り行う」との信仰説話が生まれました。

イエスの処刑後も弟子や信徒たちはユダヤ教の「ナザレ分派」としてエルサレムに留まって原初キリスト教団を形成し、ユダヤ教のシナゴグ(教会)を使い、礼拝のために神殿に通っていますが、第一次ユダヤ戦争(64~70 年)でユダヤが反乱してローマ軍団に攻められた時、非戦の立場を取ってユダヤ教と袂を別ち、各地に散り、教団は消滅しました。

代わって宣教の主力となったのが、キリキヤ(現トルコ領)の首都タルソス生まれでローマ市民権を持つユダヤ人パウロです。彼はファリサイ派の先鋭分子であり、それまではキリスト教徒を迫害してきた立場でしたが、ダマスコで復活のキリストを幻視する強烈な召命体験をして回心し、キリスト教宣教の尖兵となります。彼の第一言語はギリシャ語で、彼は雄弁で達筆でした。彼はテント製造で自らの生計を立てながら、協力者と共にローマ帝国の各地方を精力的に巡回宣教し、約 30 年間にわたって各地に教会を興し、励まし、問題点を指摘し、相談に乗ります。

当時、既にユダヤ教はローマ帝国の民衆の中に深く食い込んでいました。民衆はギリシャやローマの神々のように夜這いして他人の妻を犯すことをしないユダヤの神の尊厳に敬意を払っていました。ユダヤ人が当時の異教徒の民族の間に流行していた痛飲乱舞の歓楽に耽らないので、敬服もしていました。

そしてユダヤ人が物質的な欲求を満たそうとするよりも、精神的な学問的な理想、家族の理想を追い求める姿勢を羨ましいとも思っていたのです。前 100 年から(紀元)100 年の 200 年間、ギリシャとローマの家庭には何千本というユダヤの安息日の蠟燭の炎がゆらめいていました。ローマの哲人セネカなどは、これを憂えて、ユダヤ人の習慣があまりにも一般に普及して、これではローマ人が彼らに精神的に征服されてしまう危険があると警告しているほどです。

キリスト教が活発に布教活動をやらなければ、それらの国々がユダヤ教の国になった可能性があるのです。紀元一世紀のローマ帝国の総人口約 7,000 万人の 10%に当たる約 700 万人がユダヤ人でした。その内の約 400 万人が真正のユダヤ人であって、残り 300 万人は改宗してユダヤ人になった嘗ての異教徒とその子孫でした。現在の華僑と同じく、世界各地に進出するユダヤ人は、人口の点でも当時はローマ人に次ぐ第二勢力だったのです。

厳格な食餌法と割礼の義務がなかったら、改宗者はきっと更に多くなっていたことでしょう。原初キリスト教はパウロの時代にこの二つの条件を捨てます。そこで入門資格がユダヤ教ほど厳しくないこのキリスト教に異教徒たちはどっと群がったのでした。

キリスト教がローマ帝国で公認の宗教となる 313 年までの道のりは遠いのですが、多くの殉教者を出しながらも挫けず社会に勢力を伸ばし続ける新興宗教キリスト教のバイタリティーの前に、既に真剣に信じる者がいなかったローマの多神教は席を明け渡したのです。

3. キリスト教の正典の成立

キリスト教の新約聖書には、四つの福音書を含む 27 の文書が正典(Canon)として存在します。マルコ福音書が 70 年代、マタイ福音書とルカ福音書が 80 年代、ヨハネ福音書が 90 年代に書かれたと推論されています。イエスの死後 40 年以上後のことであり、イエスの教えとして口伝で伝承されていたものを文書化していま

す。マタイ福音書とルカ福音書は内容としてマルコ福音書を半分ほど含みながら、アラム語で書かれたQ資料を加えて書かれているため互いの内容が似通っており、この三つは共観福音書と呼ばれます。ヨハネ福音書はグノーシス派(人間と神の本質の同一性を主張し、この世を本質的に悪であると断罪する)に愛好された福音書であり、他の三つとはかなり性格が異なります。

四福音書に唯一共通しているのは、「魚とパンの増加の奇跡」(マタイ 14・13~21／マルコ 6・30~44／ルカ 9・10~17／ヨハネ 6・1~14)だけです。

新約聖書にはパウロの名前で書かれた 13 の手紙がありますが、真正と認められるのは 7 件です。これらの手紙は筆写されて各地の教会に開示され、礼拝の場で読まれております。

27 文書が正典と決定されたのは 367 年のことで、この時、ローマ教会は「何人も、これらにつけ加えたり、除いたりしてはならない。」と命じています。

新約聖書の 27 文書は、全て最初からギリシャ語で書かれています。このことはキリスト教が各民族の独自の言語で会話がなされる農村部ではなく、ヘレニズム文化が行き渡ってギリシャ語が第一言語となっている都市型の宗教となる道を選んだことを意味します。

洗練された都市住民は、既に生き物の犠牲を要求するユダヤの神殿宗教を野蛮な風習と見ており、人類の贖罪のためにイエス一人の血が流された後は重ねて犠牲を要求しないキリスト教に共感を覚えたのです。

4. 福音書に見るイエスの教え(倫理、人生観)

社会の底辺層に対する救いの言葉：貧しい人々は、幸いである。神の国はあなた方のものである。

今、飢えている人々は幸いである。あなた方は満たされる。

今、泣いている人々は幸いである。あなた方は笑うようになる。

人に憎まれるとき、また、人の子(イエスを意味する)のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなた方は幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、予言者たちに同じことをしたのである。

しかし、富んでいるあなた方は、不幸である。あなた方はもう慰めを受けている。

今、満腹している人々、あなた方は不幸である。あなた方は飢えるようになる。

今、笑っている人々は、不幸である。あなた方は悲しみ泣くようになる。

全ての人に褒められるとき、あなた方は不幸である。この人々の先祖も、偽予言者たちに同じことをしたのである。(ルカ 5・20~26)

今、貧しく惨めな生活を送るあなた方、来るべき「神の国」では、その住人として迎え受けられる。それを希求して現在を強く生き抜け。「神の国」に金持ちが来るのは非常に難しい、という明快なメッセージです。類似のメッセージは福音書に多数あります。

天に富を積み：あなた方は地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、錆び付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。

富は天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、錆び付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。

あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。(マタイ 6・19~21)

金持ちの青年：……イエスは言われた。「もし、完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから私に従いなさい。」青年はこの言葉

を聞き、悲しみながら立ち去った。沢山の財産を持っていたからである。

イエスは弟子たちに言われた。「はっきり言うておく。金持ちが天の国にはいるのは難しい。重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、ラクダが針の穴を通る方がまだ易しい。」(マタイ 19・23~24)

興味深いことに、最初の「救いの言葉」には、もう一つのバージョンがあります。以下の「心の貧しい人」とはユダヤ教徒が祈りの始めに唱える慣用句です。経済的な貧富とは無関係に、精神的に貧しいと言える状態は確かに存在します。ルカ福音書の「平地の説教」の言い方では、キリスト教から金持ちを締め出しかねません。正典の最初に位置するマタイ福音書で、金持ちも入信できるように、「**山上の垂訓**」では後世の福音書記者が次のように若干言葉を修飾しています。

心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである。その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである。その人々は満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである。その人々は憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである。その人々は神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである。その人々は神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである。天の国はその人々のものである。

わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられたとき、あなた方は幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きい報いがある。あなた方より前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。(マタイ 5・3~12)

対人関係における黄金律：敵を愛し、あなた方を憎むものに親切にきなさい。

悪口を言う者に祝福を祈り、あなた方を侮辱する者のために祈りなさい。

あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。

上着を奪い取る者には、下着も拒んではならない。求める者には、誰にでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。

人にして貰いたいと思うことを、人にもしなさい。

自分を愛してくれる人を愛したところで、あなた方にどんな恵みがあろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。

また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあろうか。罪人でも同じことをしている。

返してもらうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあろうか。罪人でさえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。

しかし、あなた方は敵を愛しなさい。

人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、沢山の報いがあり、いと高き方の子となる。

いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。あなた方の父が憐れみ深いように、あなた方も憐れみ深い者となりなさい。(ルカ 5・27~36)

姦淫してはならない：「あなた方も聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、私は言うておく。淫らな思いで他人の妻を見る者は誰でも、既に心の中でその女を犯したのである。もし、右の目があなたをつまづかせるのなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。……」(マタイ 5・27~29)

離縁してはならない：『妻を離縁する者は、離縁状を渡せ』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者は誰でも、その女に姦通の罪を犯させることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる。』（マタイ 5・31~32）

施しをするときには：「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたの方の天の父のもとで報いをいただけないことになる。だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人から褒められようと会堂や街角でするように、ラッパを吹き鳴らしてはいけない。……施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」（マタイ 6・1~4）

求めなさい：「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門を叩きなさい。そうすれば開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、門を叩く者には開かれる。……まして、あなたの方の天の父は、求める者に良い物をくださるに違いない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい。これこそ律法と予言者である。」（マタイ 6・7~12）

思い悩むな：「だから言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物より大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も播かず、刈り入れもせず、倉にも納めない。だが、あなたの方の天の父は鳥を養ってくださる。あなた方は、鳥よりも価値あるものではないか。あなた方のうち誰が、思い悩んだからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなた方はなおさらのことではないか。……だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで充分である。」（マタイ 6・25~34）

私の許に来なさい：「……疲れた者、重荷を負う者は、誰でも私の許に来なさい。休ませてあげよう。私は柔和で謙遜な者だから、私の軛を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなた方は安らぎを得られる。私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである。」（マタイ 11・28~30）

善いサマリア人：するとある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが「律法には何と書いてあるか」と言われると、彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい言葉だ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、私の隣人とは誰ですか」と言った。

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追い剥ぎに襲われた。追い剥ぎはその人の衣服を剥ぎ取り、殴り付け、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下ってきたが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやってきたが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人（ユダヤ人とは反目し合っている）は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油と葡萄酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨2枚を取り出し、宿の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっと

かかったら、帰りがけに払います。』 さて、あなたはこの三人の中で、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」 そこでイエスは言われた。「行ってあなたも同じようにしなさい。」 (ルカ 10・25~37)

高慢の戒め：「……誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」 (ルカ 14・11)

捨てた石が親石に：「……聖書にこう書いてあるのを読んだことがないか。『家を建てる者の捨てた石。これが隅の親石(その建物の最も大事な要石)になった。これは主のなさることで、私たちの目には不思議に見える。』」 …… (マルコ 12・10~11)

やもめの献金：……イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、誰よりも沢山入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物を全て、生活費を全部入れたからである。」 (マルコ 12・43~44)

5. 福音書を形作る他の要素

物語性：福音書はイエスの生涯をなぞる物語の形式を持ちます。母マリアの処女懐妊、ベツレヘムでの誕生、少年時代の逸話、ヨハネから受けた洗礼、荒れ野での修行、教えの伝道、病人の癒し、数々の奇跡、エルサレムへの上洛、最後の晚餐、ピラトの裁判と十字架刑、復活と昇天などです。

福音書が書かれるまでに約 40~60 年が経過しているための内容の変形、各福音書を用いたそれぞれの教団の思想の違い等からかなりの違いがあります。例えば、最初に出来たマルコ福音書はヨハネの洗礼から始まり、復活も途中までしか書かれていません。ヨハネ福音書にはグノーシス的な長い前書きがあります。

キリスト教をローマ帝国内に布教する立場上、ローマ帝国に不都合なことは書けません。西欧の人々からユダヤ人が排斥される理由の一つがイエスを十字架刑にかけたことですが、ユダヤ人の死刑方式は石投げ刑、ローマ人の死刑方式が十字架刑である明白な史実に目を背けています。

ローマの総督ピラトはイエスを何とか救おうとしたかの如くに書かれていますが、彼こそ後に残虐非道な統治を行ったとして告発され、ローマ政府から罷免されている人物です。エルサレム入城を民衆が歓喜して出迎えた事情から、イエスが騒乱を起こす危険性が高いと疑い、先手を打って死刑にしたのが真相でしょう。死刑前夜のサンヘドリン(最高法院)の裁きも、ユダヤ人は冷静な判断力を保つために裁判は日中に行う定めとしており、また、必ず弁護人を付けることになっており、聖書に記述された状況は納得し難いことです。ルカ福音書の続編である「使徒言行録」の最後も「パウロは、自費で借りた家に丸 2 年間住んで、訪問する者は誰彼となく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。」とハッピーエンドのような終り方ですが、その後にネロの迫害に遭ってコロセウムで殉教しました。

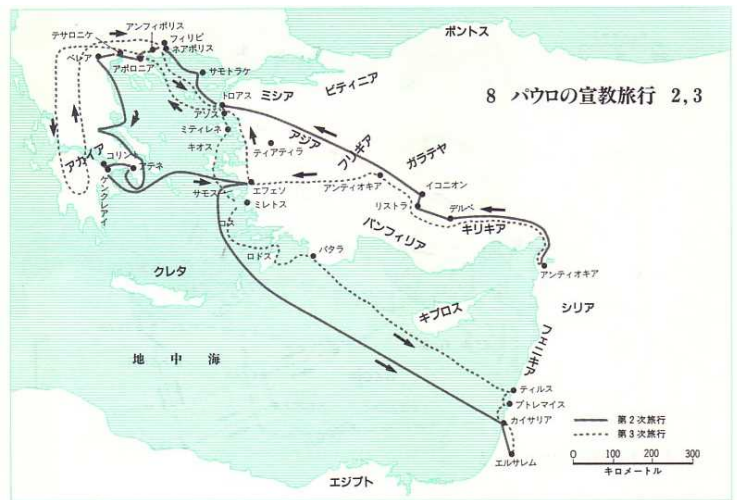
癒す神イエス：病気は何らかの神罰で病人は「罪人」と刷り込まれていた当時の病人たちにとって、イエスの教えによる解放感是如何ばかり大きかったでしょう。その感激が多数の人々の口を伝わって行く間に多くの癒しの奇跡になったのでしょう。

マタイ福音書だけでも、おびただしい病人を癒す(4・23~25)／重い皮膚病(癩病)を患っている人を癒す(8・1~4)／百人隊長の僕を癒す(8・5~13)／多くの病人を癒す(8・14~17)／中風の人を癒す(9・1~8)／二人の盲人を癒す(9・27~31)／口の利けない人を癒す(9・32~33)／手の萎えた人を癒す(9・12~13)／ベルゼブル論争(12・22~32)／ゲネサトレで病人を癒す(14・34~36)／カナンの女の信仰(15・21~28)／大勢の病人を癒す(15・29~31)／二人の盲人を癒す(20・29~34)など多数挙げられています。

6. パウロの宣教

ユダヤ社会の底辺層の人々の精神の救済を目的としたイエスの教えを、ヘレニズム文明に染まる都市住民を通じて全世界の人々の精神の救済にまで高めたのはパウロでした。

「キリスト教はイエスが創り、パウロが広めた」といわれます。まだ、正典がない原初キリスト教会ではパウロの書簡こそが信仰の支えでした。イエスはユダヤ教の改革を行ったのですが、パウロはユダヤ教の正典（旧約聖書）を否定せずに返ってイエスの事績を権威付ける根拠としながら、イエスの教えを説きます。彼は約30年間にわたって地中海沿岸都市を巡り、精力的に苦難に満ちた伝道活動が続けます。キリスト教布教の最大の功労者です。彼の第2回、第3回の宣教旅行の地図を右上に示します。



（新共同訳聖書 1987 年版）

旧約聖書の創造神は「悪い神」で、イエスの説く「善い神」とは別であるとし、旧約聖書を全否定し、ルカ福音書の不純部分を除去した新約聖書を最初に創ったマルキオン派とは全く立場が違います。結局、マルキオン派は異端として斥けられ、彼等に負けないように急いで新約聖書が編纂された経緯があります。現在の多くのキリスト教会が新約聖書と併せて旧約聖書を用いるのは、ここに起源があります。

パウロの雄弁な説得力ある書簡は、その後のキリスト教の性格を決めて行きます。彼の雄弁の一端を示しましょう。この格調高い文は、1981年のセントポール大聖堂でのチャールズ皇太子とダイアナ妃との結婚式で、トニー・ブレア首相が祝辞として読み上げたものです。

愛： 例え、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、私は騒がしい銅鑼、喧しいシンバル。

例え、予言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、例え、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。

全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとして我が身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、私に何の益もない。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、苛立たず、恨みを抱かない。

不義を喜ばず、真実を喜ぶ。全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てに耐える。

愛は決して滅びない。予言は廃れ、異言は止み、知識は廃れよう。……

……それ故、信仰と、希望と、愛、この三つは何時までも残る。

その中で最も大いなるものは、愛である。（コリント I 13・1~13）

キリスト教の信仰：キリスト教は宗教ですから、信仰が依って立つ信念があります。それは「主は生きておられる（人格神である）」「イエスは神の一人子である」「イエスは十字架刑で死んで3日後に復活して、永遠の生命の初穂となった」「キリスト・イエスを信ずる者はイエスにより永遠の生命を与えられる」「キリスト・イエスは終末の日に地上に再臨し、最後の審判を執り行う」というものです。パウロは最後の点について、次のように記します。

……即ち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主（イエス）御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それか

ら、私たち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼等と一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、私たちは何時までも主と共にいることになります。ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい。……（テサロニケ I 4・16~18）

7. ローマ帝国の迫害に耐えて国教となったキリスト教

「悔い改めよ。神の国が来る日は近い」と新興宗教に特有の活力に溢れるキリスト教が首都ローマで最初に獲得した信者の多くは女性と奴隷であったようです。彼等こそイエスが直接働きかけた社会の底辺層そのものでした。初期には人目をはばかって夜間に人が立ち入らないカタコンベ(地下墓地)で集会を持ったため反社会分子と疑われ、また、ローマの神々を認めようとしなかったために人々の怒りを買ひ、頻繁に迫害を受けています。

最初が 64 年のネロの大迫害でした。帝都ローマの大火の放火犯人としてコロセウムに逮捕したキリスト教徒を集め、5 万人の観衆が見守る中で火あぶりにし、猛獣に襲わせました。

その後も歴代皇帝から何度も迫害を受けますが、多数の殉教者を出しながらも彼等は堅く信仰を守り続け、次第に社会の上層部にも滲透して多数の信者を獲得します。キリスト教の説く高い倫理観に共感する人々が益々増えてきたのです。入信した母親から感化を受けた子供が、長じて筋金入りの信徒になる流れが多かったようです。

ローマ帝国としても大勢力となったキリスト教と何時までも敵対している訳にも行かなくなり、遂に 313 年、コンスタンティヌス帝により公認の宗教となります。

宗教も創設から年月が経つと色々な分派が出来ます。コンスタンティヌス帝はキリスト教徒の団結を帝国支配の原理として活用しようとしたので、宗教的意見を統一するために「ニケーア公会議」を開き、激しい論争の末、「父なる神と、子なるキリストと、聖霊とは、三つでありながらしかも本質的には同一である」という「三位一体説(Trinity)」を唱えたアレクサンドリアの助祭のアタナシウスの説を正統とします。

この時、キリストの人性を重んじたアリウス派は異端とされ、後にゲルマン民族の間に勢力を得ます。そして 5~6 世紀の民族大移動でそのゲルマン民族がローマ帝国を侵略・支配する、しかしローマ教会の「三位一体説」は変わりません。歴史の面白さです。

380 年に東ローマ帝国のテオドシウス皇帝がキリスト教を国教と決定します。キリスト教と政治は密接不可分な関係になり、教区の区分も帝国の行政区画が基準となりました。

このようにして国家の庇護を受け、統治機構の一部として帝国に組み込まれたキリスト教が出来上がります。もはやイエスが社会的弱者のために興した宗教ではなくなり、社会の支配階級そのものとなりました。教会の組織体制も式典・祭礼や祭具の多くも、神殿宗教であった当時のユダヤ教のものを引き継いでいます。シナゴグは教会へ、大祭司は法王と大司教に、礼拝、説教、聖体拝領の様式まで借用しています。

8. キリスト教の中世から近世

分裂するキリスト教会：多様な解釈が可能な謎に満ちたイエスの言葉と、特に「ローマの信徒への手紙」に見られるパウロの不明確な思想を盛り込んでいるために、新約聖書は地雷原のように常に爆発の危険性を孕んでいました。そのため、中央集権的なペテロの教会制度は、際限ない論争を引き起こし、11 世紀になって遂にローマ教会とギリシャ正教会への完全な分裂に至ります。聖体拝領の正確な意義を巡る論争は、16 世紀になってローマ教会をカソリック派、プロテスタント派、カルヴァン派に分裂させました。

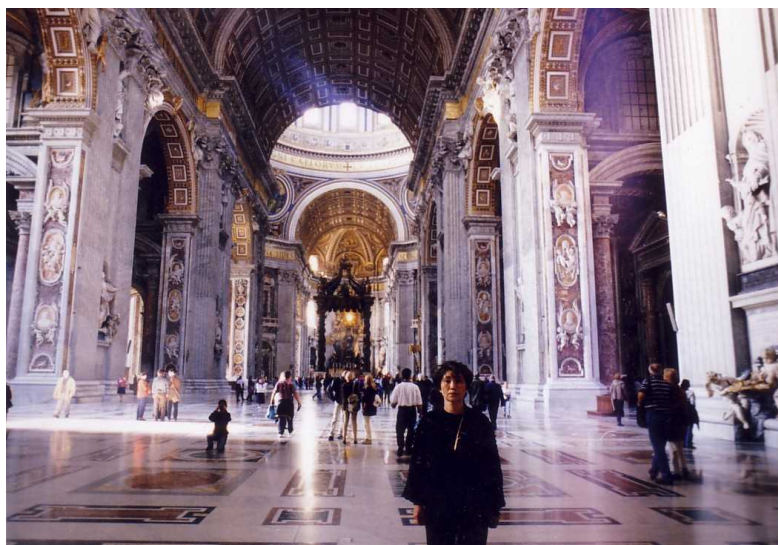
対照的なのがユダヤ教です。彼等が信じる神の姿は単純・明快です。例えば、ユダヤ人は原罪という観念を

決して採用しません。古代に生きた民族の中で、ユダヤ人ほど「死」について関心を示さなかった人たちは恐らくいません。このことによって彼等は様々な宗教的な問題を避けることができました。ユダヤ教全体の中でその教義を初めて明確に表現した注釈書「ミシュナ」の一節には「全てのイスラエル人は、来世を共に迎える。但し、律法にはよみがえりという考え方がないという者は、取り除かれる。」とあります。ユダヤ人は現世で最善を尽くすのに集中し、死とそれに伴う教義を後回しにします。神による予定、煉獄、赦免、死者のための祈り、聖者の取りなし、と言ったキリスト教内部の頭痛と争いの種は、ユダヤ人には殆ど無縁でした。このため、教義上の分派が発生することから免れています。

ギリシャ正教との分離：初期には教権の中心地はローマ、コンスタンチノーブル、アレクサンドリア、アンティオキア、エルサレムの5都市に総主教座が置かれていましたが、451年にカルケドン公会議が開催され、カルケドン信条が確立した段階で、この決定に反対してネストリウス派、コプト教会、ヤコブ教会、アルメニア教会などの単性論派は分離します。この頃にはペテロがローマ教会を創設したとの主張により、ローマ教会が首位権を主張し、公会議の主導権を握っていました。他の4教会は皇帝が教皇を兼務する体制に対し、カソリック(ローマ教会)はゲルマン民族の侵入で行政組織が崩壊した西ローマ帝国に在って、行政機関まで兼ねることになり、教皇が皇帝を兼ねる体制となり、西欧のキリスト教の中心地となります。教皇権を確立したカソリックは、8世紀に東ローマ皇帝が聖画崇拜禁止令を出したのに従わず、逆に東ローマ皇帝を異端と断罪して、第2ニカイヤ公会議で聖画像の崇拜を認める議決を行います。

その後、「聖霊発出」論争から互いの慣行上の問題まで非難し合い、1054年に互いに相手を破門し合って東西両教会は決定的に分裂しました。結局、1967年まで両教会は相互破門を解除することはありませんでした。

プロテスタントとの分裂：宗教的権力を確立した教皇は9~11世紀にかけて皇帝、領主、信徒から寄進される土地や財物を集めて巨大な封建領主になって行きます。その頂点にあるローマ教会の総本山・聖ピエトロ寺院内部の巨大さ壮麗さを一見すれば、その権力・財力の巨大さを納得できます。15世紀には法王庁は贖宥状(免罪符)を乱発して一層財力の強化に努めます。これで宗教が腐敗しない訳がありません。



焚刑に処されたチェコのヤン・フス等何人かの宗教改革者が教皇を「反キリスト」

と呼んで非難して排除されたあげく、1517年、領主などの支配階級にもカソリックの現状

聖ピエトロ寺院内部・・・彼方に巨大な聖壇（私の撮影）

に対する批判の空気が醸成された段階で、ドイツのマルティン・ルターが贖宥状反対などの95条の提題を掲げて法王庁に抗議(Protest)して民衆に支持され、宗教改革運動が起こり、広まります。

彼は「聖書に還れ！」とキリスト教信仰の理解の根底に聖書中心主義を据えます。彼はカソリックの言うように、人間は善行(寄進など)によってではなく、「信仰のみ」によって真の救いがもたらされると説きます。彼は「教皇の無謬説」を否定し、聖職者と信徒の身分上の違いを認めず、聖典礼を「洗礼」と「聖餐」に限定し、信仰者は全て神の前に立つという「万人祭司主義」を唱えます。

ルターは権力そのものであるカソリックに抵抗して宗教改革運動の口火を切った功績は大きいですが、晩年の彼は、改宗しようとしないうダヤ人に対する弾圧を領主たちに促した汚点もあり、これが近代のドイツのナチによる600万人のユダヤ人に対するホーロコーストに繋がったことは否定できず、功罪合い半ばします。

カルヴァン派との分裂：1523年にキリスト教的人道主義に立ったスイスのツヴィリングがチューリヒ市に「67ヶ条提題」を提出、公開討論でカソリック側代表を論破します。チューリヒ教会は彼のプロテスタンティズムを採用します。1529年、彼は対カソリック共同戦線を張ろうとルターと会見しますが、パンと葡萄酒に関わる「聖餐論」でルターはパンはキリストの肉、葡萄酒はキリストの血という实在説を採り、ツヴィリングは最後の晩餐に想いを致すためのシンボルに過ぎないとする象徴説を採り、話し合いがつかず、協力し合うことができませんでした。今から見ると、ルターは原理主義的キリスト教、ツヴィリングは理性的キリスト教でした。

続くカルヴァンがツヴィリングの論理性を徹底させて、宗教改革運動を完成させた巨頭です。彼は神を認識することが人生の主目的だという「神中心主義」や、救済される者と滅亡する者が神によって予め定められているという「救霊予定説」などカルヴァン独自の教義を展開します。ジュネーヴを拠点としてルター派の教会制度である監督制を破棄し、牧師、教師、長老、執事からなる「長老制」を制定し、世俗権力からの教会の完全独立を図りました。カルヴァンの思想は、イギリスの清教徒、スコットランドの長老派、フランスのユグノー、オランダの改革派などを生みしました。

ただ、救霊予定説は聖書に確かに書かれた個所がありますが、人間が神に救済されるかどうかは、本人の信仰努力に関わるのではなく、全ては神が予定していることだと言う理論ですから、これを聞いた敬虔なピューリタンである「失樂園」の著者ミルトンでさえも「私は例え地獄に落とされようとも、こんな無情な神を尊敬することはできない」といったほどです。

カルヴァン以後にもプロテスタントでは「万民救済説」など幾つも新たな新学説が唱えられ、論争が盛んに行われ、新しい宗派が次々と生まれます。プロテスタント側の興隆に対し、カソリックは弾圧を以て臨み、これに為政者の権力闘争が絡んで中世の宗教戦争が各地で勃発し、激しく繰り返され、民衆に深刻な被害が出ます。その概要は「人類と社会・・・中世から近世へ」をご覧ください。

本文作成に参考とした文献：

「ユダヤ人の歴史（上巻）」ポール・ジョンソン／石田友雄監修：徳間書店

「書物としての新約聖書」田川建三／勁草書房

「非公認版・聖書」ロビン・レイン・フォックス／青土社

「ユダヤ人(上)」マックス・ディモン／朝日選書

「神の歴史」カレン・アームストロング／高尾利数訳：柏書房

「キリスト教の本（下）」／学研

補 遺

1. イエス・キリストの語源と家族関係：

イエス・キリストをギリシャ語では Ἰησοῦς Χριστός、ヘブライ語(アルファベット化)では Yhoshuah ha-Mashiah と書きます。イエスはモーゼの後継者にして征服者ヨシュア(“ヤハウェは救い”の意)に因んで名付けられました。紀元前2世紀頃から神に選ばれた人物をマシアー「油を注がれたもの」と呼ぶようになりました。このヘブライ語はアラム語を経てそのままギリシャ語に音訳され、メシアスとなります。一方、ギリシャ語では「油を注がれたもの」のことをキリストスと呼びます。イエスと呼ぶのに、ヘブライ語でなく、ギリシャ語の称号が用いられているのは意味が深いのです。

大工であった父ヨセフは、イエスが洗礼を受ける少し前に亡くなっています。ギリシャ語の新約聖書に現れるヨセフはヘブライ語の名前ですが、母はマリアと呼ばれ、これはヘブライ語ミリアムがギリシャ語化したものです。イエスの兄弟の内、ユダとシモンの二人はヘブライ語の名前となっていますが、他の二人ヤコボスとヨセスはギリシャ語名であり、そのヘブライ語名はヤコブとヨセフです。イエスが活動の場としたガリラヤ地方はユダヤ国の中でも辺境であり、ギリシャ化(ヘレニズム化)が進んだ地方です。このため、名前の中にまでギリシャ語が滲透しています。

新約聖書はイエスの教えにより家庭内に緊張が生じたことを示唆しています(マタイ 12・46~50)。しかしイエスが亡くなった後、一家はその教えを受け入れました。弟のヤコボスがエルサレムにあった宗団の長となり、彼がサドカイ派の手にかかって殉教すると、イエスの従兄であるシモンが跡を継いでいます。イエスの弟ユダの孫たちは、トラヤヌス帝時代、ガリラヤに所在するキリスト教徒共同体の指導者となっています。

「ユダヤ人の歴史(上巻)」ポール・ジョンソン著／徳間書店

2. ガリラヤとイエス

マルコによる福音書によれば、イエスが「出てきた」のはガリラヤであり(1・9)、イエスが「神の国」が近づいたことを宣言されたのもガリラヤであり(1・14)、最初の弟子を選ばれたのも(1・16)、最初の「力ある業」を行われたのもガリラヤであり(1・28)、イエスは「ガリラヤの全地を巡り歩いた」(1・39)のであり、「おびただしい群衆が従ってきた」のもガリラヤであり(3・7)、絶えず立ち帰るのもガリラヤであり(7・31)、かならずガリラヤを通して行かれた(9・30)。

ここは遠く王国時代から「ガーリール・ハ・ゴーイム」(異邦人の地域)と呼ばれた地域であり、「ガーリール」がギリシャ語に移されてガリラヤになった。ガリラヤの人々はユダヤ教徒には違いないが、歴史上の種々の強大な諸外国によって蹂躪され、支配され、苦しめられてきた弱小の地の住民であり、600年もの間、中央から疎外され軽蔑されてきた地であった。それにガリラヤには「アム・ハ・アーレッ」(地の民)と呼ばれた極めて貧しい民衆が生活しており、彼らは正統ユダヤ教徒たちからは「良心を持たず、まともな人間とは言えない」とまで侮辱されて、律法を学ぶことさえ妨げられていた最下層の賤民として差別されていた。その他、外国人でその地方に植民した者たち、ユダヤ化された下層ギリシャ人などの居住地があった。

そのためか、ガリラヤは反権力的気風が強い地域でもあり、「ゼーロータイ」(熱心党)の多くが住んでいる地方でもあった。そしてガリラヤはギリシャ化が進行する地域でもあった。

「非公認版・聖書」ロビン・レイン・フォックス著／青土社

3. 新約聖書とギリシャ語

ローマ帝国が地中海世界の東半分に覇権をのびた時は、既にヘレニズム諸王朝の支配が二世紀半も続いた後であった。その間に、ギリシャ語が支配の言語としての地位を確立していたのである。

ローマ帝国はこの地域を軍事的・政治的に支配したけれど、文化的にはあまり支配できなかった。むしろローマ帝国の支配者も帝国の東半分を支配するためにはギリシャ語を用いざるを得なかった。

だからローマ帝国になってからは、支配の言語はラテン語とギリシャ語の二つが併用された。帝国の最上層の者たちの言語はラテン語であっても、これは人々には通じなかったから、支配のための言語としてはギリシャ語を用いざるを得なかったのである。やがては支配の最上層の中にもギリシャ語を第一言語とするもの

がどんどん出現する。ヘレニズム支配が終わっても、ギリシャ語支配は残ったのである。……

新約聖書の全ての文書は始めからギリシャ語で書き下ろされている。ほかの言語で書かれたものの翻訳ではない。それも 27 の文書の全てがそうである。部分的にもギリシャ語以外の原作はない。もっともそれらの著者が利用した資料についてはその限りでない。Q資料と呼ばれているものはアラム語で書かれたメモであったと考えられている。

古代キリスト教はギリシャ語文明の中の現象として成立し、存在し続けたから、キリスト教の著作を書くことはギリシャ語を書くことと同義であった。このため、ギリシャ語が著者の第一言語でない場合には、いかにも学校で習得した言語という調子になる。

それぞれの民族がそれぞれの言語を話していたいわゆるヘレニズム社会で、ギリシャ語の宗教として成立し、ギリシャ語の宗教に止まろうとしたキリスト教は、この世界においてギリシャ語が持っていた限定された位置に自己限定していくことになる。即ち、伝統的な民族の生活を離れて生きてきた、ないし、離れて生きざるを得なかった、大・中都市の住民の宗教として自己を確立ないし限定したのである。……

「書物としての新約聖書」田川建三著／勁草書房

4. 現代の科学者たちの宗教に対する見方

『うまく人間の海で泳ぎ回ること』ができるために、子供は自分の国の言葉や、自分の国の人間についての沢山の事柄を覚えなければなりません。ということは、とても沢山の伝統的な情報を、吸い取り紙のように吸収しなければならないことになります。…… 子供は伝統的な情報の吸い取り紙だから、大人の言うことを、真実であっても嘘であっても、正しくても間違っているとしても、何でも信じてしまいやすいということは、残念なことですが、どうしようもありません。大人の言うことの多くは、証拠に基づいた真実であるか、少なくとも良識のあるものです。けれども、その一部が、嘘だったり、馬鹿げていたり、あるいは邪悪なものでさえある場合、子供たちがそれを信じてしまうのを防ぐ方法がありません。さて、その子供たちが大人になったとき、どうするのでしょうか？ そうです。勿論、彼らは、それを次の世代の子供たちに伝えるのです。そして、何かが一旦強く信じられてしまうと—— たとえ、それが完全に嘘であり、そもそもそれを信じる理由が全くなかった場合でさえ——、永遠に続くことができるのです。

これは宗教でおこってきたことではないでしょうか？ 神あるいは神々の存在を信じること、天国を信じること、マリアが決して死なないと信じること、イエスが人間の父をもたなかったと信じること、ブドウ酒が血になると信じること——こうした信仰のどれ一つとして、正しい証拠によって裏付けられてはいません。でも、何百万という人々が信じているのです。多分きっと、人々が何でも信じてしまう幼いときに、信じるように教えられたからなのでしょう。ほかの何百万という人々は、子供のときに違ったことを教えられたために、まるで違ったことを信じています。…… そして、今度、誰かが、あることが真実だと言ったときに、『それには、どんな証拠があるのですか？』と尋ねてみてはどうだろうか。そして、その人たちが正しい答をすることができなければ、君が、言われた言葉を信じる前によくよく考えてくれることを、私は期待しています。」(10 歳になった我が子に書き送った手紙から)

リチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) / 2004/4/30 早川書房刊「悪魔に仕える牧師」(A Devil's Chaplain)
／ Fellow of Royal Society / オクスフォード大学「科学的精神普及のための寄付講座」初代教授

私は、自分を褒めたり罰したりする神や、我々と同じ意志を持つ神を想像することができない。人間が肉体的な死後も生き残るということも信じられないし、また、信じようとも思わない。弱い心の人たちは、恐れや不条理な我が儘からくる、そういう思想を抱いているがよい。私は、生命が絶えることなく伝わって行く神秘に触れたり、この世界の驚くべき構造を垣間見たり、自然の中に現れる真理の一端を、それがどんなに小さくとも、理解しようと一心に努力することだけで満足だ。

アルバート・アインシュタイン (カール・セーガンが「ビリオンズ&ビリオンズ」に引用)

キリスト教編

クリスマス、ハロウィーン、結婚式。イベントは身近でも歴史や宗派の違いはよく知られていない。
イエス生誕以降、どのように変化してきたのか。

▼「2 大宗教の思想の系譜」早わかり図解！

宗教学者・島田裕巳が
キリスト教を
徹底解説！



イエス・キリスト

原始キリスト教

日本国内ではキリスト教各派の中でカトリックとプロテスタント諸派の存在感が大きく、ロシア正教会などの正教会系は目立たない。ただし、カトリックにしてもプロテスタントにしても、日本の信者数は世界的に見て異例に少ない。キリスト教の信者数が人口の1%未満にとどまるのは世界でも日本だけだ。

その一方、キリスト教への反発も少なく、キリスト教に由来するクリスマスなどの行事は年中行事として根づいている。信者にはならないが、キリスト教

へのシンパシーは感じているというのが日本人一般の心理である。ひとつ特徴的なのは、カトリックの信者には社会的に地位の高い人が多いということだ。シンパシー醸成に貢献しているのが、数多くのミッシェンスクールの存在である。大まかにいうとカトリックは修道会、プロテスタントは宗派を単位として私立学校を運営している。

世界的に見るとカトリックの信者が圧倒的に多く、一〇億人を超えている。ローマ法王を中心とする堅固な組織を持ち、教

義は厳格だ。カトリックの家庭に生まれた子供は幼いうちに洗礼を受け信者となる。

一方、プロテスタントには統一した教義はないに等しく、極端に言えば牧師が違えば聖書解釈も異なる。カトリックにおいては人を救済するのは教会であり神父だが、プロテスタントではあくまでも信者自身で、牧師は厳密にいうと聖職者とはいえない。また、内面の信仰を重視するため、洗礼を受けるのはカトリックよりも遅く、基本的には成年に達してからだ。



451年
カルケドン
公会議

●キリストは
神性と人性の
2つの本性を
持つという立場
(両性説)が
採用され、
単性論派は分離

西方教会

ローマ・カトリック教会

1054年
東西分裂

●395年の
ローマ帝国東西
分裂以来、
対立していた
東西の教会。
ローマ教皇
レオ9世と
コンスタンディ
ヌーポリ総主教の
相互破門で
分裂が決定的に。

東方教会

東方諸教会

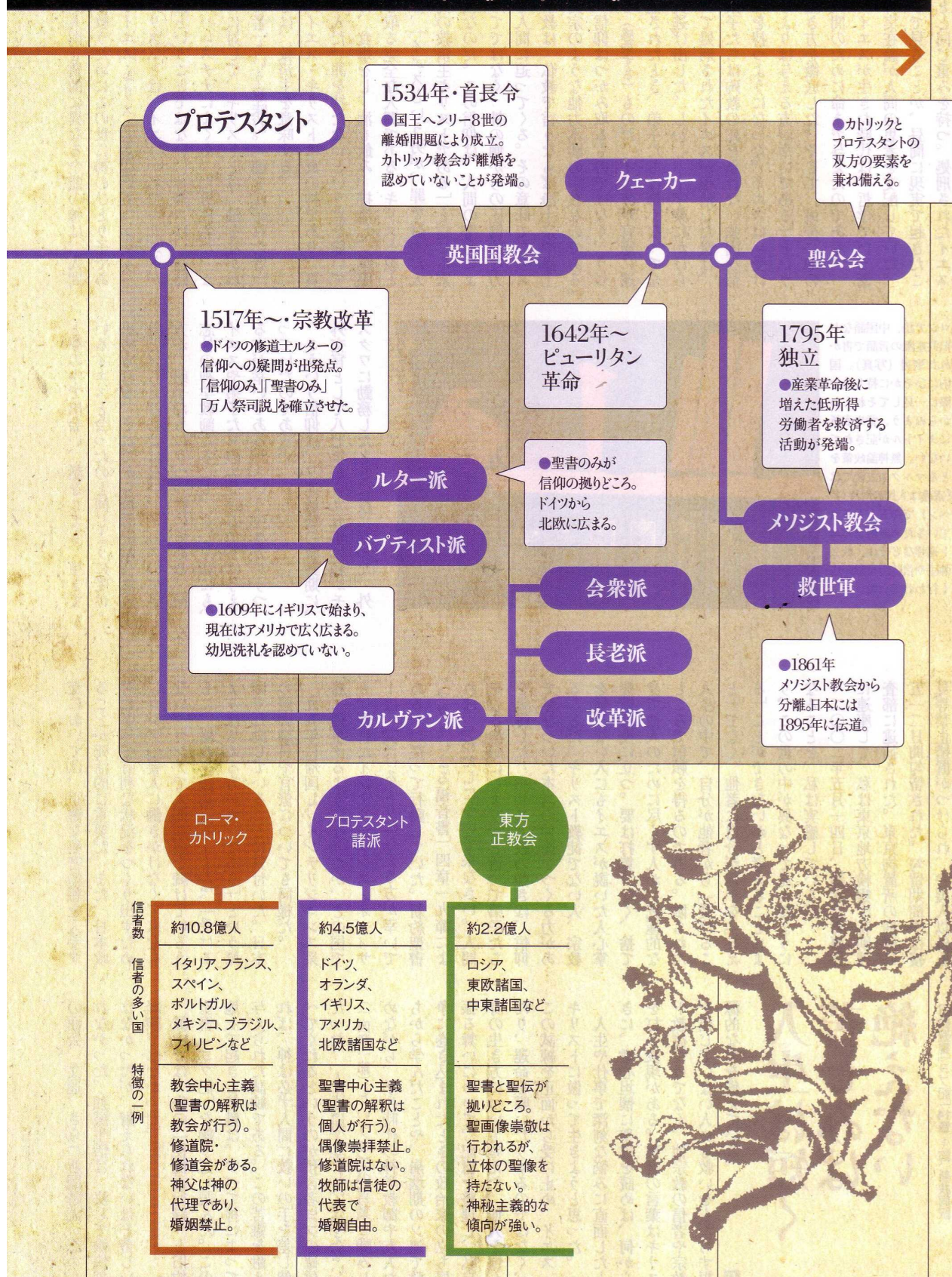
●ネストリウス派
●シリア正教会
●コプト正教会
●エチオピア正教会
など

東方正教会

●ロシア正教会
●ギリシア正教会
●ブルガリア正教会
●ルーマニア正教会
など



しまだ・ひろみ●1953年、東京都生まれ。宗教学者・文筆家。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了（宗教学専攻）。
著書は『日本の10大新宗教』『葬式は、要らない』など多数。



面澤淳市＝構成 小倉和徳＝撮影